

# 特許協力条約

発信人 日本国特許庁（国際調査機関）

代理人

岸田 正行

様

あて名

〒100-0005  
日本国東京都千代田区丸の内2丁目6番2号  
丸の内八重洲ビル424号

PCT  
国際調査機関の見解書  
(法施行規則第40条の2)  
(PCT規則43の2.1)

発送日  
(日.月.年)

10.5.2005

出願人又は代理人

の書類記号 FP0328PCT

今後の手続きについては、下記2を参照すること。

国際出願番号

PCT/JP2005/002806

国際出願日

(日.月.年) 22.02.2005

優先日

(日.月.年) 27.02.2004

国際特許分類 (IPC) Int.Cl? C07D207/16, A61K31/40, A61P3/10, 7/00, 7/10, 9/12, 11/00, 13/08, 17/06, 19/02, 19/10, 25/00, 29/00, 31/18, 35/00, 35/02, 35/04, 37/04, 37/06, 37/08, 43/00

出願人（氏名又は名称）

杏林製薬株式会社

1. この見解書は次の内容を含む。

- 第I欄 見解の基礎
- 第II欄 優先権
- 第III欄 新規性、進歩性又は産業上の利用可能性についての見解の不作成
- 第IV欄 発明の單一性の欠如
- 第V欄 PCT規則43の2.1(a)(i)に規定する新規性、進歩性又は産業上の利用可能性についての見解、それを裏付けるための文献及び説明
- 第VI欄 ある種の引用文献
- 第VII欄 国際出願の不備
- 第VIII欄 国際出願に対する意見

2. 今後の手続き

国際予備審査の請求がされた場合は、出願人がこの国際調査機関とは異なる国際予備審査機関を選択し、かつ、その国際予備審査機関がPCT規66.1の2(b)の規定に基づいて国際調査機関の見解書を国際予備審査機関の見解書とみなさない旨を国際事務局に通知していた場合を除いて、この見解書は国際予備審査機関の最初の見解書とみなされる。

この見解書が上記のように国際予備審査機関の見解書とみなされる場合、様式PCT/ISA/220を送付した日から3月又は優先日から22月のうちいずれか遅く満了する期限が経過するまでに、出願人は国際予備審査機関に、適当な場合は補正書とともに、答弁書を提出することができる。

さらなる選択肢は、様式PCT/ISA/220を参照すること。

3. さらなる詳細は、様式PCT/ISA/220の備考を参照すること。

見解書を作成した日

19.04.2005

名称及びあて先

日本国特許庁 (ISA/JP)

郵便番号100-8915

東京都千代田区霞が関三丁目4番3号

特許庁審査官（権限のある職員）

安藤 倫世

4P 9837

電話番号 03-3581-1101 内線 3492

## 第I欄 見解の基礎

1. この見解書は、下記に示す場合を除くほか、国際出願の言語を基礎として作成された。

この見解書は、\_\_\_\_\_語による翻訳文を基礎として作成した。  
それは国際調査のために提出されたPCT規則12.3及び23.1(b)にいう翻訳文の言語である。

2. この国際出願で開示されかつ請求の範囲に係る発明に不可欠なヌクレオチド又はアミノ酸配列に関して、  
以下に基づき見解書を作成した。

a. タイプ  配列表

配列表に関連するテーブル

b. フォーマット  書面

コンピュータ読み取り可能な形式

c. 提出時期  出願時の国際出願に含まれる

この国際出願と共にコンピュータ読み取り可能な形式により提出された

出願後に、調査のために、この国際調査機関に提出された

3.  さらに、配列表又は配列表に関連するテーブルを提出した場合に、出願後に提出した配列若しくは追加して提出した配列が出願時に提出した配列と同一である旨、又は、出願時の開示を超える事項を含まない旨の陳述書の提出があった。

4. 補足意見：

## 第V欄 新規性、進歩性又は産業上の利用可能性についてのPCT規則43の2.1(a)(i)に定める見解、それを裏付ける文献及び説明

## 1. 見解

新規性 (N)	請求の範囲 2-4 請求の範囲 1, 5-9	有無
進歩性 (I S)	請求の範囲 請求の範囲 1-9	有無
産業上の利用可能性 (I A)	請求の範囲 1-9 請求の範囲	有無

## 2. 文献及び説明

文献1 : US 2002/193390 A1 (NOVARTIS A.-G.) 2002.12.19

文献2 : JP 2003-520849 A (ノボ ノルティスク アクティセラスカブ) 2003.07.08

[1] 請求の範囲1及び5-9に記載された発明は、国際調査報告で引用された上記文献1により新規性及び進歩性を有しない。

文献1には、DPP-I V阻害活性を有する化合物として、1-[(4-ペンチルビシクロ[2.2.2]オクタ-1-イル)アミノ]アセチル]-2-シアノピロリジンが記載されている。

[2] 請求の範囲1-9に記載された発明は、国際調査報告で引用された上記文献1及び2により進歩性を有しない。

上記[1]参照。

請求の範囲2-4に記載された発明は、文献1に記載の化合物とは、ビシクロ[2.2.2]オクタン環の4位置換基が水素原子、ハロゲン原子、カルボキシル基である点で、それ相違している(第14頁[0187]欄参照)。

文献1に記載の化合物と同じくDPP-I V阻害活性を有し、N(置換グリシル)-2-シアノピロリジン骨格にビシクロ[2.2.2]オクタン環を有する化合物について記載された文献2には、(S,S)1-(2-アミノ-2-ビシクロ[2.2.2]オクト-1-イル-アセチル)-2,5-ジヒドロ-1H-ピロール-2-カルボニトリルが好ましい化合物として記載されている(第32頁参照)。

そうしてみると、文献1記載の化合物のビシクロ[2.2.2]オクタン環についても、無置換としてみることは当業者が容易に行い得ることである。

また、文献2には、環にはハロゲン原子、カルボキシル基を置換し得ることも記載されているから(請求項2等参照)、文献1に記載のビシクロ[2.2.2]オクタン環の置換基として、ハロゲン原子、カルボキシル基を有する化合物を想到することは、当業者が容易に行い得ることである。